

# 宗教儀式、宣教行為、そして一致の象徴 ——I コリントにおける「主の晩餐」再考——

大坂太郎

## 序

「聖餐論」とグーグルで検索をかけるとオートコンプリートで出てくるのは何と「聖餐論争」である。勿論狭義における「聖餐論争」の端緒となったのは1529年のマールブルグ会談における「これはわたしのからだ（血）である」を巡るルターとツウイングリの見解の相違にはじまる一連の事件を指すのである<sup>1</sup>が、聖餐を巡る論争は現代日本のキリスト教界を揺るがす大きな問題となっている。一方では日本基督教団においては2000年代頃からそこに所属する保守的な教会（教会派、伝道派とも言われる）から「聖餐のみだれ」、つまり洗礼の有無、より正確に言えばキリスト教信仰の有無に関らず参加者が聖餐に自由にあずかれるように聖餐を執行する（フリー聖餐）教会があることが指摘され、その流れの中で2007年の第35総会において上記のような形で聖餐式を執行している北村慈郎牧師の教師退任勧告決議案が可決され、さらに2010年1月には日本基督教団初の免職処分となったことは記憶に新しい。他方で現在東京、大阪などでダイナミックな信徒の数的増加を見せているオーストラリア・アッセンブリーズ・オブ・ゴッドに所属する宣教師によって主導されているペンテコ

<sup>1</sup> 東野尚志、「カルヴァン『信仰の手引き』を読む」その22『雪ノ下通信 ONLINE』  
<http://www.yukinoshita.or.jp/tsuushin/k9906.htm>

## I. 排他的宗教儀式としての「主の晩餐」

### A. 「偶像の神殿での食事」と「市場で売っている肉」の区分

第一義的には 1 コリント 8-10 章は主の晩餐を取り扱っている段落ではない。むしろパウロが取り扱っているのは偶像に捧げた肉について (Περὶ δὲ τῶν εἰδωλοθύτων) であった (8:1)。しかし 8-10 章を精読するとパウロの偶像に捧げた肉を食べることについての態度は簡単に黒白をつけられるものでもない。というのはその答えは複数の異なる状況によって変化しているからである。パウロは「すべて市場に売っている肉 (Πάν τὸ ἐν μακέλλῳ πωλούμενον)」（10:25）、「信仰のないものに招待されて」（10:27）という表現を用いて、肉がどこで供されるかということに着目している。つまり当該箇所においては①キリスト者が偶像神の祝宴に参加し、そこで飲食をするというケース (8:1-14; 10:14-22)、②かつて異教徒の手を通り、異教の神に供えられた肉が市場で売られているケース (10:25,26)、そして③信徒が未信者の家の食事に招かれた場合 (10:27-31) の3つのこととなるケースが想定され、それぞれに独立した答えがあるということがわかるのである<sup>4</sup>。

### B. 偶像の神殿で「偶像に捧げられた肉を食べるべきでない」2つの理由

まずキリスト者が偶像神の神殿において偶像に捧げられた肉を食べるかどうかという事例においては、パウロは2つの理由からこれを拒否している。まず 8:4-13 においてであるが、パウロはまず 8:1-3 において自らが問題を解く根本的な鍵が知識ではなく愛であることを説き、続く 4-6 節において 8:1 と同様「わたしたちは」と一人称複数を用いて、コリント教会で恐らく問題行動を起こしていた信徒たちと基本理解を共有していることを述べている<sup>5</sup>。その理解とは、世にいうところの偶像の神は実在せず (8:4)、全てのものは父なる唯一の神から出、唯一の主なるイエス・キリストによって存在する (8:6) ということである。しかしながら、この同じ知識を共有しながらもコリント教会の

<sup>4</sup> L.モリス、『コリント人への手紙第1 (ティンダル聖書注解)』村井優人訳、(いのちのことば社、2008年) 145頁。

<sup>5</sup> G.D.Fee, *1 Corinthians* NICNT (Grand Rapids: Eerdmans, 1991) 370.

ステ派のジーザスライフハウスではライブハウスでそれぞれの食べ物を手に持って祈り「かんば〜い!! って、ジーザスに感謝☆ (原文ママ)」をするというカジュアルな聖餐式をもあったり<sup>2</sup>、今年の初めにはなんと日本式におにぎりとかジュースを食べてみんなで聖餐式を祝おうという企画がなされ、そこには新しい味噌汁を食べてみんなで聖餐式を祝おうという企画がなされ、そこには新しい人がいた旨が記されており、ピースサインの男女がにこやかに写真にうつっている<sup>3</sup> など聖餐式をめぐる理解は加速度的に複雑化しているようである。

このような状況下において「聖餐」を語ることは大胆な試みである。だが混乱した牧会状況の中で真理を模索し、それを語ることは実に新約聖書的な営みであるともいえる。なぜならどのようなように保守的な霊感論を取るにせよ新約聖書、ことにパウロ書簡が第一世紀における初期キリスト教運動の個別かつ多様な「状況」に向かって語られた「状況文書」であることは厳然たる歴史的事実だからである。言うまでもなくパウロが直面した「聖餐のみだれ」は今日我々が直面しているそれとは異なるところが数多くある。しかしながらその文脈における固有な状況に肉薄していくとき、実にそこから今日の課題に対する示唆が見えてくるのである。

本小論において筆者は聖餐論についての言及が見られる 1 コリント 8、10、そして 11 章を取り上げて釈義的研究を行う。具体的にはコリント教会における「主の晩餐のみだれ」に果敢に立ち向かった使徒パウロの言述を排他的宗教儀式、宣教行為、そして参加者に霊的一致をもたらす象徴行為という三つに分類して考察をする。そして結論部分においてこれらの知見から得られたものを総合し、聖餐にゆれる現代日本のキリスト教界に対して一定の提言を行うものである。

<sup>2</sup> ジーザスライフハウス大阪チャーチ！ブログ

<http://izumisynydney.cocolog-nifty.com/blog/2008/12/post-bcda.html>

<sup>3</sup> ジーザスライフハウス大阪チャーチ！ブログ

<http://izumisynydney.cocolog-nifty.com/blog/2011/01/post-f5b0.html> 勿論ここにはイエスが十字架にかかってくれたこと、復活したことを思い出して、イエスがしてくれたことに感謝します、という伝統的な教会との連続性も保持されているが、本基調は聖餐式を「祝う」という表現であることに筆者は着目している。

一部がとった選択と使徒パウロの選択は全く正反対であった。というのもコリント教会の中のある人々はこの「知識」を根拠にして、こともなげに偶像の宮での祭儀的食事に加わっていた。対してパウロは一方では偶像なるものは存在しないという理解をコリント教会のクリスチャンたちと共有しながらも、自らは偶像に捧げた肉を今後いっさい食べることとをしないと強烈な否定をしている<sup>6</sup>。というのも若しそのことをすれば確実に同じ教会の中の弱い兄弟たちの良心が汚され(8:7)、つまりまづきを与え、更には偶像の神殿での食事はこの弱者たちに悪い教育的効果を与え、彼らを救いではなく滅びに至らしめてしまいうからである<sup>7</sup>。つまり唯一神に対する知識は正しくとも、その適用において教会における弱者への愛を欠くならば、その結果はその人を高ぶらせるばかりか、信徒を滅びに向かわせることになってしまうという事態が実際にコリント教会には起こっていたのである<sup>8</sup>。

そのような未消化で断片的な知識を乱用することによって信徒を躓かせている、自らは知者を自称するコリント教会の信徒に対して、パウロは自身の見解を明瞭に述べる。使徒パウロの人生の目的は愛をもって福音を宣揚することにより主のからだなる教会を建立することであつたから、コリント教会の人々が愛を行動の中心に置かず、信徒をつまづかせることは看過できないことであつた。これらのことを総合するとここでパウロが偶像に捧げられた肉を食べるべきではないと結論づけた第一の理由は弱い兄弟たちを躓かせてはならないという牧会上の倫理的要請があつたからだだと結論付けることが出来る。

しかしなぜパウロは自らも実体がないと認める偶像の神殿の中で食事をすることが信徒を永遠の「滅び」へ至らせると考えたのだろうか。その理由は10:14以下に明瞭にされている。10:1からのセクションにおいてパウロはコリン

<sup>6</sup> 原文では οὐ μὴ φάγω κρέα εἰς τὸν αἰῶνα, と否定辞を2つ重ね、接統法を用いる強力な否定形が用いられている。

<sup>7</sup> この「滅び」(ἀπόλλυμι)という語はパウロ書簡ではいつも永遠の滅びを指すものである。Fee, *1 Corinthians*, 387 参照。だがブルースはこれに反対している(モリス, 153 頁)。

<sup>8</sup> Fee は10 節は原文では ἵνα + 接統法の形、即ち一般的な仮定の形でかかれてはいないものの、議論の緊急性などから考えると単なる仮定と言うよりも現実的に発生していることを取り扱っていると考えている。

ト教会への教訓としてこの主題を補強するために出エジプトの物語をアレゴリカルに語るのだが<sup>9</sup>、そこには血肉によるイスラエルが神のイスラエルである教会(ガラテヤ6:16)がもつ2つの象徴、即ちバプテスマ(10:2)と聖餐(10:3,4)の雛形ともいえる体験をしていたことが述べられている。しかしそのような恵みの体験をしながらも、彼らの大部分はむさぼり(10:6)、偶像崇拜(10:7)、主を試みたこと(10:9)、そしてつづやき(10:10)のゆえに滅ぼされたパウロは主張する。これら一連の背信行為のなかでコリント教会と最も深い関係があるのは偶像礼拝の問題であつた。そこでパウロは主の晩餐に与ったものが、偶像に捧げられたものを飲食することは悪霊の食卓に与ることになる、つまり偶像礼拝を行ったことに等しくなるのだからそれをやめるようにと強く警告しているのだ。

コリントのクリスチャンのあるものは自らを「思慮分別のあるもの(φρονίμος)」と自称し、神はお一人であり、偶像などはない、またそもそも私はキリストにあって自由なのだからどこで何を食べてもかまわないという一種の「合理化」を行い、偶像の宮でよく行われていた宗教的であり、且つ社会的な食事<sup>10</sup>をクリスチャンになつてからも異教徒たちと共にしていたようである。それに対してパウロは異教の神殿での飲食は主の食卓が主と共同体を結ぶ宗教的な儀式であるように、悪霊に捧げられたものを共に食す宗教的な儀式なのだから、とりもなおさずそれは偶像礼拝であり、その結果は主のねたみを引き起こすからそれは忌むべきタブーなのだと主張しているのである。

上記のことを総合すると、当該文脈における主の晩餐の言及は、その主要な目的は偶像礼拝との類似を示すために用いられているのではあるが、これは逆説的にではあるが主の晩餐が主に連なるもののために設立された儀式的食事であり、誰でもそこに与れるというものではないという排他的性格を持つことを示しているとも言える。

<sup>9</sup> R.B.ヘイズ、『コリント人への手紙1』 焼山満里子訳、(日本基督教団出版局、2002 年)、273 頁。

<sup>10</sup> Fee, *1 Corinthians*, 361.

C. 市場で売られている肉と未信者の家に招かれた場合に肉を食べるべきではない例外的理由

以上の討論を終えたパウロは 10:23 以降において実際的な結論を導き出す。まずパウロは大原則を提示する。それは「すべて市場で売っている肉は調べ上げずに食べてもよい」というものである。というのも当時店頭で売られていた肉のほとんどは最初は何らかの神に供えられたものであったという事実があったから<sup>11</sup>、そのことを過剰に詮索するときに供えられていないからである。次にパウロは未信者の家に招かれて食事をするときでも何でも食べてよい (10:27) とする。だが、ここでパウロは一つの例外的事例を挙げる。それがもし異教徒の食事の席に招かれたときに、誰かが「これは若しや偶像に捧げた肉ではないか」と詮索し、それを気にしている場合はたとえそれを飲み食いすることが偶像礼拝になることはないにせよ、忠告してくれたその人を「つまずかせない」ために食べてはいけないのである。端的に言えば、パウロは全ての信徒を立て上げるために、愛を持って、神の栄光のために全てを行い、時には自己放棄をいわずそれをするよう指導したのである<sup>12</sup>。

## D. まとめ

上記のことを総合し、特に 10:1 以下の出エジプトとの類比から考えると当該文脈においてはパウロが主の晩餐をバプテスマを受け、神との契約的關係に入ったもののみが受ける排他的宗教的儀式として、またそれを通して一つキリストのからだにあずかる、聖徒の交わりをもたらしものとして理解していたことは明瞭に結論付けられる。

<sup>11</sup> モリス、前掲書 144 頁。

<sup>12</sup> モリスは 9 章は一見すると 8、10 章と違う主題を取り扱っているように思えるので、この章を他の手紙からの挿入だという仮説を使って説明する学者がいるが、そういった仮説を立てなくても 8-10 章を統一的に読むことは可能であると考えられている。(モリス、155 頁) つまりパウロはここで自分の使徒である権利と、福音のゆえにそれを「行使しない」自由に自らが生きていることを教えることにより、10 章の結論を暗示しているのである。

## II. 宣教的行為としての「主の晩餐」

### A. 主の死を告げ知らせる「主の晩餐」

パウロはルカと共通の伝承を用いて主が聖餐式を制定した目的を「私を想起するため (εις την ἐμὴν ἀνάμνησιν)」と述べているのだが、では人にキリストを思い起こさせる「よすが」となるのは何だろうか。26 節には「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです (11:26)」と書かれていることから、ある学者たち (Weiss など) はここでの「告げ知らせる (καταγγέλλω)」はパンを裂き杯を飲むというドラマチックなアクションによってのみ (傍点は筆者) なされるものだと考えている<sup>13</sup>。しかしながらそれは早計である。というのもパウロ書簡においてこの動詞は当該の箇所を含めて 7 回用いられているが (ロマ 1:8、1 コリ 2:1、9:14、11:26、ピリ 1:17,18、コロ 1:28) 当該箇所以外ではすべて口頭での福音の告知が前提されていることが明らかであり<sup>14</sup>、更にこの直接の文脈においてもイエス自身がパンを裂き、杯を取るときに「ことば」を発していることから考えても、これはむしろ「言葉」と「行為」が不可分に結びついた典礼全体が「宣べ伝える行為」として機能していると解釈するほうが妥当であろう。芳賀はアウグスティヌスが洗礼の水について語った有名なことば「水という素材にことばが加えられて秘蹟となる」また「ことばから水を取り去ってみなさい。そうすれば水はただの水以外のなんであろうか」を引用し同じことがパンとぶどう酒にも当てはまると述べているが<sup>15</sup>、確かにこの箇所においてはそのような「ことば」と「行い」の平行関係が認められる<sup>16</sup>。

<sup>13</sup> H. Conzelmann, *I Corinthians* trans. by J. W. Leitch Hermeneia (Philadelphia: Fortress, 1975) 201, n.100. Fee, *I Corinthians*, 557.

<sup>14</sup> モリス、前掲書 194 頁。

<sup>15</sup> 芳賀力、『洗礼から聖餐へ』(キリスト新聞社、2006) 133 頁。

<sup>16</sup> 大崎は「神の自由な恩寵行為は現実の人間、人間の全体に、真に有効にかかわるという深い福音認識に基づいているのである。こうして説教と聖礼典は、互いに堅く結び合い、且つまたそれぞれに課せられた務めを果たすことによって、神の今日における自己啓示の業に奉仕する」と述べ、説教と聖礼典の不可分性について語っているが、興味深い見解である。参考、大崎節郎、「改革派教会における

## B. 「主の死」－告知の内容

「わたしを覚えて、これを行いなさい」とイエスは言われたが、パウロはそのイエスのことばを用い、26 節においてその思い起こすべきものを特定かつ強調しているが<sup>17</sup>、それが「主の死」(τὸν θάνατον τοῦ κυρίου)であることは大切である。もちろん「主の死」は「主が来られるまで (ἄχρι οὗ ἔλθῃ)」という述語と共に用いられることにより、終末論的な視座をも持つことは事実ではあるが、その前に「主の死」という、どん底のケノーシス<sup>18</sup>なしに主イエスに真実な感謝を捧げることがそもそも不可能なのだ。だがコリント教会の人々は聖餐式の根本にある、私たちに救いをあたえ、一つにするために主ご自身が裂け目のないその体を引き裂かれたという真実な痛みの告知を無視し、聖餐式をいわゆる愛餐とをない交ぜにして、受難の主を思い起こすことを忘れ、更には共に聖餐に与るべき兄弟姉妹の存在はなきものにして、みずからの腹を満たすためのきわめて自己愛的な自分の食事に変容させてしまった。それに対してパウロは主の晩餐において思い起こすべきはかつてはパリサイ派のユダヤ人として自分もそれにつまづいていた<sup>19</sup>「十字架にかけられたキリスト」であることを強く主張しているのである。

## C. まとめ

上記の内容を整理するとパウロが考える「主の晩餐」とは教会内で行われることばと行為が統合された主の死の宣告であり、それにより私たち自身の救いが有効なものとされるようになったことを思い起こし、主イエスご自身を記念する儀式であると考えられる。

聖餐の問題」日本基督教団宣教研究所編、『聖餐』(日本基督教団出版局、1987年)、62頁。

<sup>17</sup> Fee, *1 Corinthians*, 556.

<sup>18</sup> 参考、ピリビ 2:8

<sup>19</sup> M. ヘンゲル、『パウローキリスト教回心以前のパウロ』梅本直人訳 (日本キリスト教団出版局、2010) 167頁。

## Ⅲ. 霊的一致の象徴的行為としての「主の晩餐」

## A. コリント教会における「聖餐のみだれ」

前述した「偶像に捧げた肉」の問題と比べると II:17-34 におけるいわゆる主の晩餐に関する記述の背後にある状況を再構成することは比較的容易である。当時のキリスト者の集会は個人の家で行われており、「主の晩餐」や「パン裂き」と呼ばれる儀式を含む形で愛餐がなされていたと想定されるのだが<sup>20</sup>、そこに分裂があったというのが問題の所在である。この分裂は恐らくは社会的地位の上下を反映する形で現れたと思われる。家の集会の主催者は勿論共同体の中の富裕層であり、その友人たちが食堂に陣取ることになる。ところが、この食堂の収容人数は座った状態で9名ほどしか収容できない。それ以外の人はといえば中庭に座ることしか出来ないといった状態であったろうと想定される<sup>21</sup>。そしてこの中庭に招かれるのは恐らく仕事帰りの貧しい会員であったろうとも推定される<sup>22</sup>。だが分裂はそれにとどまらない。回心して間もないコリントのクリスチャンたちはキリスト教の愛餐を彼らが所属していたクラブや団体における会食と混同していた可能性も指摘される。モリスはタイセンを引用しそのような食事の決まりの中には役員には一般会員よりも最大で3倍もの料理が振舞われることもあったということを述べているが、このような「世」の重力圏から未だに脱出しきれていないコリントのクリスチャンたちの間では食堂には飲めや歌えで酔っているものが、そして中庭にはひもじい思いをしているものがあり、集会所が構成されていたという状況があったと考えられる<sup>23</sup>。しかしここに

<sup>20</sup> I.H. マーシャル、『使徒の働き』(いのちのことば社、2005年) 99頁。ちなみに芳賀は「復活後再び集められた弟子たちの集会の中では普通の交わりの食事と区別されて、あの裏切りの夜の記憶と結びついた「パン裂き」と呼ばれる特異な儀式があった」述べているが、実際には論理的な区分はあったとしても、過ぎ越しの食事がそうであるようにやはり食事の中に取り入れられていたと考ええるほうが自然だと思われる。参考、芳賀、74頁。

<sup>21</sup> ヘイズ、前掲書 322頁。モリスの引用 (190頁) によれば、大邸宅の平均的なものでも全体で50名を収容することは難しいと述べている。

<sup>22</sup> モリス、同上。

<sup>23</sup> モリス、190頁。

は明らか、しかも真理による分裂とはことなる、あつてはならない分裂状態 (σχίσματα) があつたのだ。

# B. パウロの示した解決

このような本来の「主の晩餐」とは全くかけ離れた状況を取り扱う上でパウロがまづしたことは自らが語ることの起源が実にイエス・キリストにまでさかのぼるということであつた。ここでモリスは1人称単数の代名詞 (Εγώ) が用いられていることに着目し、これはガラテヤ1:12などに見られるもの、即ち神がパウロに直接啓示した真理を指すと考えているが<sup>24</sup>、フィーはガラテヤ書における直接啓示はキリストの死と復活を通しての贖いのメッセージであつてイエスの教えと生涯の記録に関するものではないことと、パウロがここで見ている「受けた (παράλαβάνω)」と「手渡す (παράδίδωμι)」の組み合わせはその語られていることの設立について示す表現であることから、むしろこれはユダヤ教における伝統の伝達の技術用語として捉えるべきであると述べており、こちらの方が文脈に沿った理解だと思われる<sup>25</sup>。

ではイエスが設立した最初の「主の晩餐」とはどのようなものであつたのだろうか。一言で言えばそれはコリントで行われていた自称「主の晩餐」とは正反對の性格を持つものであつた。まず全体を貫く主調音はコリント人の集会に漂う浮かれた宴席にありがちな浮ついた長調ではなく、渡されて (11:23)、肉が裂かれ (24)、血が流され (25)、死ぬ (26) という重く陰鬱な短調であつた。次にその食卓に着く目的についていえばコリント人たちのそれが、飲み食いしと宴樂であつたのに対し、パウロが示したのは、主が設立した杯とパンを受けることにより主の死を思い起こすことであつた。またコリント教会ではこの食事の結果共同体の中に裂け目が走つたのに対し、パウロはあるべき聖餐の

<sup>24</sup> 同上、191頁。

<sup>25</sup> Fee, *1 Corinthians*, 548, 721. これらの使徒的福音の継承と個人的啓示のかかわりについて内田は「パウロの福音は個人的に啓示されたものでも内容は使徒の福音であることを明らかにしている。このように使徒的福音との連続性を強調しつつ、なお“私の福音”と表現するのは、福音を特別に委託された者としての自覚故であらう」と述べているが、これは興味深い見解である。内田和彦、「伝道の使信」『福音主義神学』第40号 (日本福音主義神学会、2009年) 22頁。

姿はみからだ (11:29) をわきまえるものであり、主の裂かれたからだにより、信徒を一つに結ぶものであると考へたのである。興味深いのは11:29における「みからだ (τὸ σῶμα)」の理解である。コンツェルマンやモリスはこの節を27節の流れで理解する<sup>26</sup>。即ち「みからだ」ということばで肉と血の両方を含むと考へる。もしこの見解を採用するならばそこから出る結論は聖餐における相応しさとはキリストの体と血とに与ることを大切に、かつ意識的にそれを行うということに集約されるだろう。他方、フィーはそれに反対し、むしろこの「みからだ (τὸ σῶμα)」を10:17における、キリストの血肉によつて結び合わされた信徒の結合である「キリストのからだ」なる教会と理解する<sup>27</sup>。

また内田は過越の食事として最後の晩餐を位置づけるとパンと杯の間隔が空いていたという事実があることに着目し、パンと杯それぞれには独立した意味があると考へ、そうであればおそらく一つのパンが目の前で裂かれたとき彼らは同じ一つのパンに与っていることを身をもつて体験したことになると述べているが<sup>28</sup>、そうだとすればパウロがここで「みからだ」という表現を単独で用いていることは単独の意味、すなわちこれを主のからだである教会と解するフィーの見解を支持する傍証となると考へることが出来る。この解釈であればパウロがコリント信徒に要求した聖餐における「ふさわしくない」状態とは個々人が神との間にどのような罪行を行ったかといった垂直的關係における罪というよりも、むしろ主のからだである地方教会が貧富の差や、社会階層によつて引き裂かれていゝることを容認、助長しているといった、信仰共同体を揺るがす人間關係の中に見られる罪を指すと考へることが出来る、それはとりもなおさず当該の文脈に非常によく適合するものと考えられる。

パウロはこのような神学的な取り扱いを述べた上で、主の晩餐を含む食事に集まるときには11:21に示されるような愛のない愛餐、愛の茶番劇ではなく、待ち合せて共にキリストのからだに血に与り、主にある一致を得たことを感

<sup>26</sup> モリス、195頁。Conzelmann, *1 Corinthians*, 202.

<sup>27</sup> Fee, *1 Corinthians*, 562, 3.

<sup>28</sup> 内田和彦、「最後の晩餐と主の晩餐」聖書神学舎教師会編、『聖餐の聖書的な理解を求めて』(いのちのことば社、2004年)、172頁。

<sup>29</sup> モリス、190頁。

謝すべきことを主張している。

### C. まとめ

コリント教会が直面した「聖餐のみだれ」と「ふさわしくない」態度が顕在化する引き金となったのは、「主の晩餐」と「キリスト者の愛餐」を混同し、さらには「主の晩餐」と「異邦人社会で行われていた一般の宴会」とを混同したことにある。それに対して使徒パウロはすでに教会が保持していたイエス・キリストに起源を持つ「主の晩餐」の伝統に訴え、主の晩餐の真の意義は主の死を告知することであり、またことばと行為によってなされる主の死の告知により、陪餐者に主イエスご自身を思い起こさせることにであると強く主張した。同時にコリント教会で起こっていた社会階層による差別の結果、全員が参与できない分断された聖餐は主の贖罪の事実に対する罪であると同時に「キリストのみからだ」である教会の軽視につながり、その結果は個人に対するさばきと、なっている個人に帰するものだとパウロは考えていた。そのような危機的な状況を打開するためにパウロはこの書簡をもってコリント教会を指導し、真理の正道へ引き戻そうと懸命の努力を続けたのである。

### 結論

以上、紀元1世紀における主の晩餐やクリスチャンと他宗教との関係などの諸問題にゆれるコリント教会に対してのパウロの教導について概観した。これらは確かに2000年前のコリント教会における固有の問題ではあったが、そこから引き出せる主の晩餐に関する各種の見解は、今日、同じく聖餐みだれにゆれる状況に生きている者にとっても傾聴に値するものである。以下に上述の知見を踏まえ、冒頭で述べた現代日本のキリスト教会が直面している聖餐を取り巻く種々の状況への提言を述べ、本稿の結論とする。

- ① 巷間話題になっている受洗、未受洗、信者、未信者の別なく主の晩餐に全ての人を招くという、いわゆるフリー聖餐の立場は当該の箇所からは到底擁護することが出来ない。教会はその最初期から、食事の時間の中に「パ

ン裂き」や「主の晩餐」という、イエスの過越しの祭りの食事に起源を持つ贖罪論的、教会論的、そしてキリスト教を他宗教と分離するという意味での排他的な宗教儀式を行っていた<sup>30</sup>、コリントにおいて発生した問題の解決のためにパウロが支持したのは主の晩餐（聖餐）を一般の食事からの一層の分離を推進するという見解であったことなどを考えると主の晩餐を信者以外のものに開く意味は全くない結論付けられる。しかしながら巷間呼んでいるように「未受洗者への配餐問題」として、受洗者＝信者と限定することに關しては合同教団である日本基督教団の中にもバプテストのようないわゆる「信者の洗礼」の教理を奉ずるグループもいるわけだから、信仰告白をした未受洗者の陪餐の可否については議論の余地は十分にあると思われる<sup>31</sup>。

- ② 主の晩餐は主イエスキリストご自身を記念するために行われるものであるが、その記念の中心にあるものはイエスキリストの死の告知である。イエスが自らその肉を裂き、血を流されたという真実に根ざさねば真の復活の喜びなど起こるはずもない。この告知はまた単に所作だけが突出するのではなく、「パンを裂き」「杯を飲ませる」という所作とそれを説明する「ことば」が固く結合されたものであるべきである。もとより死の告知とは厳粛なものであり、さらにその死体を食するという行為は当然のことながら一種のタブーであるから、聖餐式に与る相応しい態度として「厳粛」さが要求されることはごく当然のことである。そうであればはじめに取り上げたような手近にある食物とカップをもってカジュアルに「カンパニー」といってジーザスに感謝するというやり方は「主の死」という厳粛な概念が正しく伝わるかどうかの疑問を禁じ得ない。またクリエイティブな、あ

<sup>30</sup> 芳賀、71頁。芳賀はまた主の晩餐をイエスの罪びとたちとの食事や5000人(4000)の給食などのさまざまな食事の連鎖の最後にして頂点に位置するものであり、その最後にして頂点に位置する食事に特別な枠組みを与えているものが過越しの祭りであるという。参考、芳賀、72頁。

<sup>31</sup> 大住雄一、「日本基督教団における未受洗者への配餐の問題—その本質にあるもの」[http://kyodan.holy.jp/hc\\_o03.pdf](http://kyodan.holy.jp/hc_o03.pdf)

らない。

- ④ 聖餐の起源をイエスと罪人たちのした一般的な食事にあるとして、主の食卓を食事と混同させてしまうことは戒められるべきであるが、他方で初代教会が大切にしていた愛餐により食事の持つグループ形成のダイナミズムを教会の中に取り入れる試みは歓迎されるべきである。

使徒パウロは旧約の諸伝統を踏まえ、その預言の収斂点であるイエスご自身により（ロマ 10:4）逾越しの祭りの最中に設立された主の晩餐を主が来られるまで継続するように勧め、それを受けて教会は今日に至るまでそれを続けてきた。そのなかで多くの聖餐論争がなされたし、これからもそれは継続していくことは必然的な帰結であると思われる。しかし実にパウロ自身がこのセクションを「その他のことについては、私が行ったときに決めましょう」と開放的に結んでいることを考えるならば、対話と議論をこれからも続けていくことは意味深いことだと言わねばならない。状況を無視して真理を無理矢理結晶化させようとする営為はそもそも神学的ではない。むしろパウロが、ルターが、ツヴィングリが、カルヴァンがそうであったように神学をするものが、それぞれ現場の「状況」に真実に向き合い、修正し、暫定的解決を見出しつつ、教会共同体形成に資する知見を引き出したように、私たちも途上にある存在として時々刻々生起してくる主の晩餐に関する諸見解に目をそらさず、主の再びこられるまで「ことば」と「行為」により人の躓きとなる主イエス・キリストの死を告げ知らせつつ、感謝を持って「主の肉を食し、その血を飲む」<sup>34</sup>一つの主

て、戦争責任を強調したために「狙い撃ち」されたと述べている。

<sup>34</sup> 西堀俊和、「実にひどい話だ、人の子の肉を食べ、その血を飲むとは」『福音と世界』（2008年5月号）、27頁。西堀は「人の子の肉をたべ、その血を飲む」という実にひどい話こそが聖餐の本質ではないか。そして永遠の命も、神の交わりも、終わりの日の復活もこの躓きとなるひどい話を回避してはありえないとはつきり書いてある（中略）信仰とはこの「ひどい話」恵みとして受け入れることである」とコメントしている。聖餐の中にある残酷さについてはG. タイセンも『聖書から聖餐へ』203頁に「聖餐は象徴的に演出されたカリバリズムであり、共同体の食事として贖罪の生贄を祝うものである」としているが、他方で「その社会

るいはコンテンツチュアライズされた聖餐のやり方と称して、主ご自身が制定され、そこから連綿として続いてきた物素であるパンとぶどう酒を軽々におにぎりや味噌汁に変えてしまふのは慎重さを欠く行為であると結論せざるを得ない。特に現代日本では主イエスが制定した物素が手に入らないということはないのだから、主ご自身の制定された物素を軽々に他のものに置き換える理由は見当たらないと考えてもよい<sup>32</sup>。また聖餐式の執行者の「ことば」「行為」を説明するものとして決定的に重要である。主の死を明瞭に告知する聖餐式文の制定が福音主義の立場に立つ各教派によってなされることは急務であろう。

- ③ 聖餐を受けるものの「ふさわしさ」については一般には個人が神の前に悔い改めるところがないかというといった内面的なものを考えたり、あるいは主の体と血とにあずかることを真実に意識するというように理解されることが多いのだが、11:29などの用例をみれば、当該文脈における「ふさわしさ」を判定するのは共同体における世俗的な価値基準の流入がもたらす隔ての中垣の存在の有無であることが解る。一つなる主のみからだに与ることが真理と不真理を峻別する以外の理由で意識的であれ、無意識的であれ阻害されることはまさに聖餐に「相応しくない」営為である。現在日本基督教団内に起こっている聖餐論に関する論争を観察するとき、それをパウロの言う「ほんとうの信者が明らかにされるためには、分派が起こるのもやむをえない」という邪心なき真実な動機で行われている議論なのか、あるいは最初から結論ありきで反対者の排除を行わんがために主要な反対者を執拗に「狙い撃ち」<sup>33</sup>をしているのかは慎重に見極められねばな

<sup>32</sup> 興味深いことに前述したジーザスライフハウスでは聖書を人生のマニュアルだと述べ、それを絶対的な真理主張の根拠とするいわゆる「福音派的」なメッセージをし、イエスに学ぶことを大切にしているのだが、イエス自らが制定した聖餐の様式については「文化的」なものと捉えているとしか考えられない。ジーザスライフハウスに通っており、その様子について記したブログとしては、Fujishima Itsuo, 「疑問に思えば、疑問に賛成—ジーザスライフハウスの光と霧」<http://www.fujishimait suo.de/2011/03/18/>を参照。

<sup>33</sup> ウィキペディア、「北村慈郎」。免職となったときに北村はインタビュアーに対し

のみからだとしての教会共同体の形成に励みたいものである。

(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団 ペテルキリスト教会牧師)

---

規範にふれる道徳的禁忌違反は復活のイエスが生きているという確信なしには不可能である」とも述べている。この緊張の中にある「絶妙」の真理こそ「福音」である。